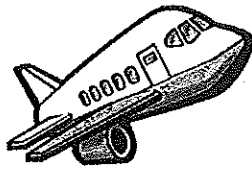


March
2015



RIKKYO SCHOOL
IN ENGLAND

「日本航空の工場見学」



ぼくは、この冬休みに日本航空の工場見学へ行ってきました。以前から一度行ってみたいなあと思っていたので、とても楽しみでした。

待ちに待った工場見学の日。心配症のぼくは、集合時間よりもとても早く日本航空の工場に着いてしまいました。しかし、早く着いたおかげで、羽田空港から離陸していく飛行機をとっても間近で見ることができました。飛行機が飛ぶ「音」だけでなく、「風」も感じるほどの近さは、生まれて初めてです。ぼくは、この時点でワクワク度がマックスになってしまいました。こんなにワクワクしたのは、立教の入学式以来です。

見学の時間になりました。日本航空の建物に入ると、入口で「見学者カード」をもらいました。それを首から下げて、そのカードを使ってゲートを通り、3階に上がりました。

エレベーターを降りると、すぐに操縦や飛行機誘導の体験コーナー、客室乗務員の制服の展示があり、日本航空の社員さん達が普通に歩いていたので、それはまさに日本航空の世界でした。

ぼくは、まずパイロット体験をしました。^{この表現、気に入りました。写本。やみくもにやらないことって}パイロットの制服を着て操縦席に座っただけで、^{ありまね。}
②気分は上空1万メートルでした。飛行機誘導体験もやってみました。ただ両手に旗を持って振るだけの作業だと思っていましたが、予想以上にうでがつかれてしまい、難しいことだとわかり、驚きました。

そして、工場を見学する前に、日本航空の人がスライドを使って、飛行機について説明をしてくれました。

飛行機を点検したり、修理したりする整備工場を見学しました。ちょうど座席の交換をしていました。もう一つの整備工場では、何と通常は見ることのできない、政府専用機の一号機が整備を受けていました。今年の政府専用機の整備は、日本航空が担当しているそうです。

とても貴重な体験ができました。とてもうれしかったです。

(小学部6年 田中祐太郎)

「ワクワク度がマックス」や「まさに日本航空の世界」などの表現から、とても興奮した
様子が伝わってきます。田中君のパイロット姿もみてみたいですね。(シ度)
ほめて昔々、飛行機が大好きで、その景観を良く知り、そのワクワク感がよく伝わるいい
作文ですね。(1杯)
田中君の興味津々な様子が伝わってきます。読んでいてこちらも楽しくなってくる文章です。
休みのために良い経験をしていますね。飛行機もかっこいいですが、そこを動く 車
人たちがかっこいいですね。パイロットになるには勉強が大事、ぜひ目標にして下さい。市川
田中君の工場見学をしている様子が文章から伝わってきて、読んでいて私も楽しい気持ちに
なりました。実際に足を運び、興味のあることに触れられ、とても貴重な時間が過ごせましたね。有勝
飛行機の風を感じて、わくわくしている田中君の様子が熱々です。その時受けた
風を、日々思い出して過ごされているんですね。梅津
読んでいて人にもワクワク感が伝わる作文ですね。
飛行機の「風」も感じるほどの近さ、私も体験してみたくてワクワクしました。(4)
実体験が田中君らしい言葉でいさいと書けている、元気な作文ですね。
Mm

「冬休みの思い出」



「家族の事も信用出来ないなんて、家族じゃない、同居者だよ！」

自分の手が震えているのが分かった。それは冬の夜だったからかもしれないが、多分、自分が怖かったからだと思う。たくさん傷つけているけど、いつもゆるしてもらって、そして優しくしてくれる。自分はもしかしたらこういう親の接し方に調子に乗っていたんだと思う。暗くてよく見えなかったが、多分もう少しで泣きそうな顔をしていたと思う。

その夜から、僕は「家族」について考えた。まず辞書を引いてみると、血縁関係によって結ばれた親族関係を基礎にして成立する小集団と出てきた。これは困った。僕的には、もっと気持ちの面でも答えて欲しかった。ただ血がつながっていればいい、ではなくてそれ以上に絆だとかそういう物があると思ったからだ。そもそも絆とは何か？と考えてみた。どうやったら絆が出来るか考えた。でも絆はできているかどうかすら分からない。だとすると、絆という物はもしかしたらないのかもしれない。いつか裏切られるものかもしれない。それが怖い。なら次に人間はどのような行動をとるのか？僕はそれは傷つける、という行動だと思う。この傷つける、という行動をとることによって、その人との絆がどこまであるのか、ということを計ろうとするのだと思う。しかし、この行動によって大切な人を失ってしまう、という可能性もあるだろう。「家族」とは、確かに血のつながった小集団だ。しかし、血のつながり、というものだけでは決して絆は生まれまいだろう。血のつながりがあるから、家族であるからこそ、友人では出来ないような、裏切られないようにするための傷つけ合いがあってもいいのではないだろうか？

僕は部屋から出た。その時、僕の目には熱い水がたまっていた。風邪だから、という事にしておかないと家族のぬくもりに包まれて大きな声で泣いてしまうだろう。今回の冬休みで僕は「家族」という大切な存在に気付かされた。

「お母さん、ごめんなさい」

(中学部1年 鮎田忠治)

自己心理の分析、それから文の構成とてもうまいです。なかなかの文章になります。渡辺

相変わらずおもしろい文です。また、学びがあるのがとても良い。もっとも、お父さん、お母さんから多くのことを学び、感謝の気持ちも伝えましょう。市川
「傷つける行動をとることによって人との絆を確認する」という文には、ほととせられました。最初と最後の書き方も好まれます。梅沢

家族は自分にとって最も近い存在、だからこそその関係は美しくもなり、醜くもなり得るね。これからも沢山悩んで自分を成長させていって下さい。(16)

「家族」というものを、傷つけ合いけど裏切らない存在としてとらえるようにこの休み中に家族との絆を通じて成長した鮎田くんの姿がみえました。高野

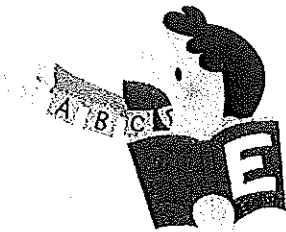
自分なりに「家族」や「絆」について自己分析を行い、他者にわかりやすく伝わる文章が書けていることに好感が持てます。これからも様々なことを考え、文章にしていってほしい。(17)

普段は近いからこそが難しい家族について考える機会が増えるかもしれませんね。いつも支えてくれる家族をこれからも大切にしたいですね。斎藤 亜

好きな家族がいるというのが幸せですね。勿論お父さんお母さん、1人1人への愛情のことですね。(18)

選んだテーマもさることながら、考えたことと的確な表現が言葉にしっかりとつなげてゆく力に優れたものが見られます。man

「英語の大切さ」



今回の冬休み、家族で初めてハワイに出かけた。海の色は日本の海と全く違うエメラルドグリーン色、サラサラのパウダーサンド、心地よい貿易風。世界中からたくさんの観光客が足を運ぶのも納得の、きれいな浜辺だった。

街中を歩いている時、たくさんの異国の人を目にした。アジアの人、オセアニアの人。皆英語で会話しているのを見て本当に英語は世界共通語なんだと強烈に感じた。いつもはイギリスでイギリス人が英語（母国語）を話すのは当たり前、私は日本人なのだから話せなくても当たり前だと思っていたが、それがちょっと言い訳がましい考えだったと思えるくらい、その光景はインパクトがあった。自分も英語をもっと勉強しないとイケないなと焦る気持ちを覚えた。

現代は交通の発達や貿易などによる経済のグローバル化や国際協調により、どの国でも外国から来た異民族がいるので、ほとんどの国が多民族国家である。英語力が求められることが多くなってきている。そんな中、日本は珍しく単一民族国家に近い。

単一民族国家だと何が問題なのか。例えば少子化が進行している日本では国内でモノが売れなくなる。消費人口が減ればそうなるのは当然のことだ。これからお金を使う世代、つまり子供の数が減るということは、学校をはじめ、衣食住全てにおいて消費が減る。そうなればお金が流通しなくなり、経済そのものが縮小していくと考えられる。そうなってくると国内だけでは経済が成立しない。だから企業が海外の市場に目を向けていくのはごく自然な流れだと思う。

国内のヤマダ電機に行けば、そこにあるのは日本企業の製品ばかりだが、海外の市場に多く並んでいるのは韓国製ばかり。日本の製品は良いと言っている人が多い中、韓国製品を買う人が増えているのはなぜか。原因のひとつに、売り方に問題があるらしい。日本人の売り方の下手さ、英語の下手さが原因のひとつだ、と批判されているのはなんとも耳が痛いことだ。

ユニクロや楽天が社内公用語を英語にしたというニュースを聞いた。その時点では正直その取り組みについてその有用性を実感できなかった。しかしこれは、

「世界で通用しない従業員はいらない」

と言ったのと同じ事であると気づいた。将来自分が求められる人材になるにはどうしたらよいか。それは技術や知識も大切だが、世界共通語となった英語でしっかりと自己主張できることであると思う。

もちろん自分にとって、今の時点で英語で会話する事は簡単ではない。しかし今私はイギリスに留学していて、日本人学校ではあるが、日本の学校に比べたら英語を話す機会や授業は多い。だからこの環境を有効に活用出来るように工夫をしなくてはと思う。自分の取り組み方と気持ちを変えれば大きなリターンを得ることが可能なはずだ。

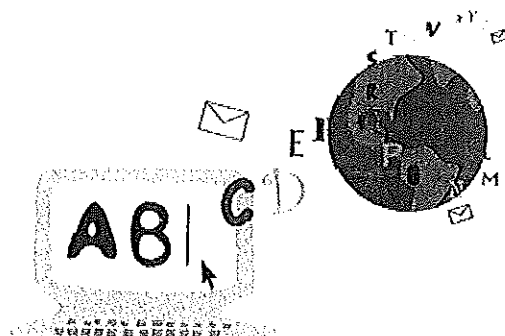
これからは英語の勉強にもっと積極的に取り組んでいこうと真剣に思える冬になった。

(高等部1年2組 大石桃子)

視
受
て
ら
え
た
も
の

考
察
の
展
開

問
疑
題
問
提
起



はじめの3行の出し、ハワイらしい美しさか凝縮された良い表現です。
社会の流れにも敏感でよく考えていて、ただただ感懐せられました。
毎回ウキウキがすばらしいです。(渡)

旅行の思い出かと思いきや、企業のグローバル化の話、多民族国家の話に繋がって
いて、大石さんがよく勉強していることが伝わってきました。藤井

とても平和に富んでいますね。英語なんてでても当たり前くらいなの、カンガイ
大人になつて下さい。市川

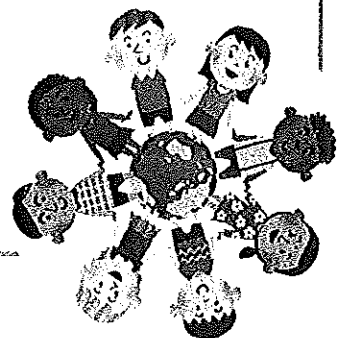
旅行を楽しむだけでなく、たくさんの方にアンテナを張り、
充実に日々を過ごせるようであらね。日本人であることで
意識し、自分が社会で担うことができる役割について、しっかりと
考えていることがよく伝わってきました。高野

ただの旅行から、「英語を話すこと」「グローバル社会」についてよく考えられて
いて感懐させられる文章です。海外に来てびっくりしたのは、まさしく韓国製品
の多さでした。日本が世界の中で地位を保つためには(国際社会で置いてけ
ぼりにならないためには)どうすればいいか、ぜひ10代から考えてほしい
テーマです。杉本

旅行をただの旅行で終わらせず、多くの発見から様々なことを考えたの
ですね。今後も社会学、言語学、異文化、コミュニケーションなど色々な分野で
興味、関心の幅を広げていて下さい。(秋)

ハワイの光景がこんなに深山の事と存心でくんと語りますね。そういう君の心の動きが
にじみ出てくる。英語、頑張ってください。小川

ひとつの認識から、今まで自分がひとまずアタマの中にため込んで
きたことを組み合わせ、考え、考え、展開して、これからの指針
にまとめてきている構成が良いです。大石の思考の流れが
見えるようで、堅実さと深さが感じられます。いいものを持って
いるようです。いいものはどんどん磨くべし。大石の広さが
世界よりも大きな広さになるように。阿部



「社会学習を通して」



この春休み、私は父の勤めている会社でアルバイトをしました。朝早く起きて会社へ行き、いくつかの雑務をこなして夕方に帰る。そんな生活を2週間、過ごしました。

父が勤めているのは車の部品会社なので、いくつかの工場が隣接しています。アルバイト日には工場見学もあり、様々な機械がせわしなく動いて部品を加工している様子も見せてくれました。コンピューターが自動で機械をコントロールして、精密にすばやく一つのものを作り上げる。一体どうすればこんなシステムを生み出すことができるのだろうか、と目を輝かせながら見てまわりました。

その途中で、案内してくれている人がふと一つの扉の前で立ち止まりました。そしてこちらを振り返って、顔をしかめながら何かを言ったのです。工場内の音でうまく聞き取ることができませんでしたが、何か良くない事を言ったのだということは伝わってきました。その人が扉を開けると、中からものすごい悪臭がしてきました。聴けば、工場内のゴミを処理する場所だと言うのです。私は一秒でも早くここから出たいと思いました。正直、息もしたくない程でした。

しかし、悪魔はやはりいたのです。私は毎朝、そこの手伝いをしろと命じられました。もうこのまま抜け出して帰ろうかとも思いましたが、命令は命令です。私は重い足どりでその場所へ向かいました。

そこではおじさんが数人働いていました。その内の一人に、何をすればいいかと尋ねました。彼はマイクといい、まっ黒に汚れた作業着を着ていました。そこでの初めての仕事は、工場中にある捨てられたダンボールを回収することとなりました。集めたものはプレス機で一つの塊にして、リサイクルをしやすいのだと教えられました。そしてこれからは毎日、ダンボールの回収をお前に手伝ってもらおうと言われました。

始めの内はまだ、こんな所で働きたくないとか、早く帰りたいとか思っていました。が、毎日マイクの顔や、周りの人達の接し方を見るに連れて、私の考えは変わっていきました。彼は自分の仕事に誇りをもっている。そして様々な人から信頼されている、ということに気付いたのです。普通であれば誰もが嫌がる仕事。ただし、全員のために誰かがやらなければならない。マイク達はそんな仕事を任されていたのです。

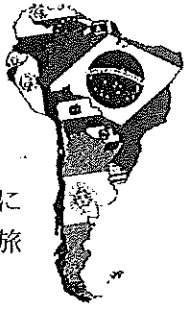
私は今までにこういう裏で支えている人達の作文を何枚も書いてきました。しかし、今回の体験でそんな人達の重要性を身をもって感じました。全員が心地よく生活するために、全員が楽しむことができるために、全員が笑うことができるために…。私はその全員のための誰かになりたいと思いました。

(高等部2年2組 朝本和志)

体験に字びがある。概念として知っている。しかし体験がこれほどまでに身にしみ込むほどの実感を伴ったものはない。作文

現代に生きる僕たちは、ゴミや汚れから離れすぎて、自分たちがゴミで出で存在であることを忘れがちですね。普段も、君たちの部屋をキレイに作り、またクリーニング店にも感謝しましょう。大抵の人が嫌がる仕事をこなす人たちがいるから、私たちの生活は成り立っている。そのことに改めて気付かされる作文です。よい社会勉強になりましたね。朝本
自分のことは自分でちゃんとやっている、と思いがちですが、自分でやっていると思えるのは
その裏で誰かが支えてくれているからなんです。その誰かへの感謝の気持ち
だけでなく、自分がその誰かになりたい、という想い、大切にしています。①
どんな仕事にもやりがいがあり、それを見出せるかどうかは自分次第。
すべてのものごとが誰かの支えによって成り立っていることを体験して、自分本位
でなく、将来に目を向けてほしい。ワカノ。
どんな仕事でも、誇りをもって仕事をしている人って本当にすばい。朝本君が仕事を始めた時、マイク
のこと思い出しながらがんばっていたね。
学校でもその他の社会の中でも裏で支えてくれている人がいるんですね。“マイク”という名前から
海外での体験でしょうか、とても貴重な体験ですね、うらやましいです。斎藤亜
自立して、気づかれない、人のために行動することはなかなかできないことであって、そういう母には見えない
気づきにくいものの大切さを改めて気づかされました。私もそういうものに気づける人になりたいですね。
そうすると、世の中の見方も変わり、文句よりも感謝の思いが出てくる気がします。渡辺

「人生最後の南米旅行」



冬休み。僕がブラジルに帰る最後の休みだ。春には日本への本帰国が決まっている。外国に居住している間、休暇の時には毎回旅行をしてきた。もしかすると、これが家族との最後の旅行になるのかもしれない。今回は6泊7日でブラジルの隣国、アルゼンチンへ渡った。

南米のバリと呼ばれる、アルゼンチンの首都、ブエノスアイレスから飛行機で南へ約2000キロメートル。ペリトモレノ氷河への拠点となるカラファテを訪れた。氷河の融解・再氷結のサイクルが早いことで世界的にも有名な氷河のひとつで、「生きている氷河」と呼ばれている。

12月～3月にはビルの大きさほどの氷の塊が大きな音とともに一気に崩れ落ちる大迫力の瞬間を見ることができる。美しい巨大な氷河が崩れ落ちる様子は氷の塊が生きているということを感じることができる。自然のスケールの大きさを感じた。

クリスマスは南米大陸の南端、南極に最も近い「世界最南端の町」ウシュアイアで迎えた。この町にある世界一南に位置する鉄道「世界の果て号」に乗った。今では観光鉄道として人気のこの汽車は、かつては流刑地とされていたウシュアイアにあった監獄の囚人たちの手で建設され、一年中必要な薪を切り出す作業のために日常的に使われていたという歴史があることを知った。

さらに船でビーグル水道のアザラシ、海鳥、ペンギンが生息している島々を訪れ、アルゼンチンの大自然を思う存分味わうことができた旅となった。

南米旅行を通して気付いたことは、日本では決して見ることでできない大自然の彫刻が数多く存在するという。僕はそれらの絶景に魅了されていた。ほんとうに貴重な体験ができたと思う。

(高等部2年1組 池田匠)

短い文章が、ひきつられる文章です。

“大自然の彫刻”という言葉、うなづかました。この言葉だけで、その想像をかきたて、興味をそそきます。うまい表現です！ 渡辺

短い文章の中で訪れた場所を簡潔に説明できていて、一緒に旅行をしているような気分になります。感動が伝わってきます。 高野

日本においては絶対に出来ない体験ですね、そこで見たもの、感じたこと、味わったこと、今後の人生の糧にしている下。 (批)

池田君の旅行記シリーズ南米編は終わってしまいましたが、今度は日本国内編とか？ 小島 味のいい文体がいいものようにとても心地いいですね。 小島

毎度読む人の興味をそそく旅行記ですね。世界最南端の町、ぜひ行ってみたい！ 南米編は終わってしまうようですが、これからも池田君の作文を楽しみにしています。ぜひその文体で世界各地の良さを伝えていってください！ 杉本

南米も、ギリシャも、とても重要な経験になっていると思います。最後とせず、何度も訪ねて下さい。その土地の文化は、もと変化しているはず。でもおもしろいんですよ。 市川

今まで池田特派員の南米紀行文を楽しみにしてました。貴重な体験に留まらず、あなたの作文は歯切れよく、小さく魅力ある表現のあちこちに散りばめられており、魅力が大きかったです。臨場感にあふれた写真もついて、いいことろを高く評価しています。 〆

休み中の池田君の作文毎日とても興味深かったです。作文を読んでいると、頭の中でその地域をイメージ、行きたいと思えてくる文章ですね。 齊藤 亜



「時代をこえて」

今日東京のある場所で催されている展覧会に行ってきた。私の大好きなガウディのものだ。私がガウディを知ったのは、中学の時だ。旅行先でガウディが設計した教会、サグラダ・ファミリアを見た時、体が雷に打たれたように一目惚れをした。建物に一目惚れなんておかしい話だが、確かに心を動かされたのだ。

彼の建築は生きている。ただそこに建っているだけではなく、人の心を揺さぶる“生”のエネルギーを感じさせられる。そう思ってから、サグラダ・ファミリアに限らず、彼の作品が好きになった。

話を戻すが、今回の展覧会は彼だけのものではなかった。スラムダンクの作者、井上雄彦さんとコラボレーションしたものだ。彼はスペインの親善大使に任命されており、今回のために実際に一ヵ月スペインに住んだらしい。井上さんが描いたガウディの漫画とガウディの描いた設計図や、模型が交互に置いてある形式だった。

彼の絵は、和紙に描かれていて繊細だが、とても力強い。私は彼の絵を見て、2人がコラボレーションできたのも納得がいった。2人とも漫画と建築というジャンル、そして生きている時代、と何一つ共通点がないように見える。しかし2人の作品には、作品を最高のものにしたいという思いから、目には見えないパワーを感じた。どんなに小さなものでも最高のものにしたいという思いがあれば、彼らの作品のように、生きるのではないか。そう思った夏だった。

(高等部2年2組 田中絢菜)



「体が雷に打たれたように一目惚れ」そんな出会いなかなかないです。これから人生の様々な場面でガウディからパワーをもらいたい。梅津

「作品が生きている」作者は亡くなくても、その命は作品と共に永遠に生きつづけるかもしれないね。(株)

「建築物に一目惚れ」を良い表現ですね。サグラダ・ファミリアを見にきたくなりました。これから自分の興味のあることをどんどん深めていってください。斎藤重

形は違えど「芸術」という点においての共通点を見出す田中さんの感性がよく表現された作文ですね。どんな分野であれ、「一流」の人たちは熱意が違う。そういうことですね。根本的に心に直に接して、芸術に感動で芸術家になるのは素晴らしいこと。その感動が長く伝わる文章です。小川

田中さんの感動と興奮が伝わってきます。建築物に一目惚れなんていう言葉はいいですね。田中さんのアンテナの鋭さが言葉で上手に表現されています。ジャンルがかわっても、芸術作品が出会うと、すごいパワーになるよね。私もこの展覧会に行きたいです。すごく楽しみです。何かを体験し、作り続けることに、生命力を感じますね。日々の生活のちがいが人生を形づくっています。大切にしましょう。市川

それぞれ別々に見たものを、ちゃんと融合させて書かれています。ガウディや井上氏の作品をとり上げず、具体的にもっと詳しく書く部分と盛り込むと、作文に厚みが出てくると思います。

美術批評家のような文章ですね。「体が雷に打たれたように一目惚れ」ともいい表現です。そんな衝撃的な思い、私もしてみたい、と思う程でした。(渡辺)比喩表現の良さを改めて感じられるような表現で、私もいつか使ってみたいです。



私はこの春休み、自分が生まれ育った街について考えてみた。

私の住む広島県福山市という所は、瀬戸内海の中央部に位置し、年間を通じて非常に住みやすい気候にも恵まれている所だ。そして緑も多く、ハッキリ言って田舎だ。

その南部に位置する「鞆の浦」は風情残る城下町で、「日本で最も癒される港町」とも称され、宮崎駿監督の映画「崖の上のポニョ」の舞台にもなっている。映画の中では江戸情緒たっぷりの町並みや風景が鮮明に描かれていた。ここは、380年続く伝統行事「鯛網漁」も行われ、今では全国各地から観光客が集まる名所となった。瀬戸内海で獲れる魚は本当においしく、週末には朝市が開かれ大量の魚がとれたてのまま並んだり、テントの下や路地で魚を捌く姿が見られ、焼いたり煮たりする匂いが漂っている。私も朝早く起きて家族で新鮮な魚を買いに行ったものだ。

幕末に坂本龍馬指揮の舟が「鞆の浦」沖で紀州藩の軍船と衝突、沈没した事件「いろは丸事件」に関わる史跡も多く残っている。それだけではない。室町時代には、将軍・足利義昭が拠点をおく浦に移したり、江戸時代に朝鮮通信使が度々寄港し、福禅寺から眺めた風景を「日東第一形勝」と賞賛した。

そして街のシンボルでもある「薔薇」だ。一九四五年、広島原爆投下後の八月八日、ここ福山も空襲に遭い市街地の約八割を焼失した。荒廃した街の復興を願い、人々の心に安らぎを取り戻そうと、住人の植えた一本の薔薇苗が今では七十七万本となって、街中の至る所に凛と美しく咲いている。

当時を思うと育てるのは大変だったろう。しかし、その花が人と人とをつなぎ、街や人々の心に自信と安らぎを与えてきたのではないかとも思う。

クリスマス前になると、ボランティア活動の一環として千個の折り薔薇を使った「祈りのばらツリー」製作に参加していた。これもまた、市民が考えた幸せを願う祈りのプロジェクトだ。

私は学校に居て見ることはできないが、今年の五月も薔薇の花が咲き誇ることだろう。一本の薔薇から始まった美しい花々を思いだしながら、今年もそっと祈りを捧げたい。

(高等部2年2組 奥迫花音) よく知り、レコリと語れている作文です。知恵がさを感じます。

いい町ですね。誇りにできる喜びが何回もよくわかります。と、26年前の文章に感動。(小田) 自分住む町について、ここまで語れる若者がどれほどいるだろう。奥迫さんの故郷への愛着が伝わりました。 杉本

福山に行きたいなあと思わせる文章ですね。故郷に誇りを持てるべきだということ。それだけ故郷を知っているということ。身近なものほどその価値を見つけるのは難しいもの。語れる奥迫さん。かっこいいです。タカ 奥迫さんの「ふるさと」の魅力が伝わってくるすばらしい文章ですね。いつか行きたいです。 斎藤

故郷への愛と誇りが伝わってくる文章ですね。故郷から遠く離れたイギリスにいるからこそ、「ふるさと」の魅力を改めて感じることでできているのかもしれませんね。(桃) ふるさともよく知っている人は、いかにか少ない。せめてふるさとに詳しい人間として、その良さを伝えていって下さい。 市川

外国にいたがらも、しっかりと生まれ育った町・福山について語れる奥迫さん。すばらしいなあ、と思いました。文藝のある南英についても、いつか作文に書いてみたいですね。読んでみたい! 松井 故郷のことをよく説明しており、パンフレットを読んでいるように、良いところなんだろうな、行きな! と思わせる作文でした。私の故郷は、玄海灘の近くで、とても魚がおいしいところなので、似てるとても懐かしい思い出にさせられました。(渡)

「違う風景」

朝、とても肌寒く感じて目が覚めた。朝日の昇りはじめた窓の外を見ると、雪が降っていた。中欧では当たり前の景色だったが、その時の僕にとっては、この雪がとても特別なもののように思えた。

タイミングを逃しちゃダメだ。そう思った。なんのタイミングかもわからないまま着替えると、カメラを手に家を一人飛び出して行った。

僕は写真を撮るのが好きだ。別に趣味でも特別うまいわけでもないが、我流でそれなりに様になった写真を撮っている。カメラを持ち出したのも、そのためだ。

家を出るとすぐに旧市街が現れる。ファインダー越しに見えた景色は、いつもの街並みではないことにとても驚きを覚えた。

旅先では必ず僕はシャッターを切る。新しい物、新しい風景が広がっているからだ。その自分の見た風景を忘れないために、いつか思い出せるようにと僕はひたすらシャッターを切り続ける。

この日のブラチスラバにも、それがあった。見慣れた教会、劇場、広場、歩道まで、どれも自分にとって新しく感じられた。

何度も見たことがあるのに、何でもない町のはずなのに、僕は白銀に輝くその「何でもない町」に魅せられていた。

ペストの塔を凝ったアングルから撮っていたからだろうか、通りがかったおじさんが犬を連れて僕に寄ってくるなり「フォトグラファーかい？」と尋ねてきた。顔を見ればどう見ても学生のはずなのだが、その時の服装でそう見られたのかもしれない。自分が口を開く前に彼は間髪入れず「いいスポットがあるんだ。」と言。僕は何も言わず彼の後をついていくことにした。

そこから5分。「ここだ。」と言うなり彼はいなくなってしまった。そこはどこだろう、自分の家の裏にあるお城だった。このお城は山の頂上にあり町全体を見渡せる場所なのである。

いつものランニングコースなのに、なぜこの景色を見落としていたのだろう。

雪で衣替えをした町をファインダー越しに見ながら、目から涙がこぼれた。

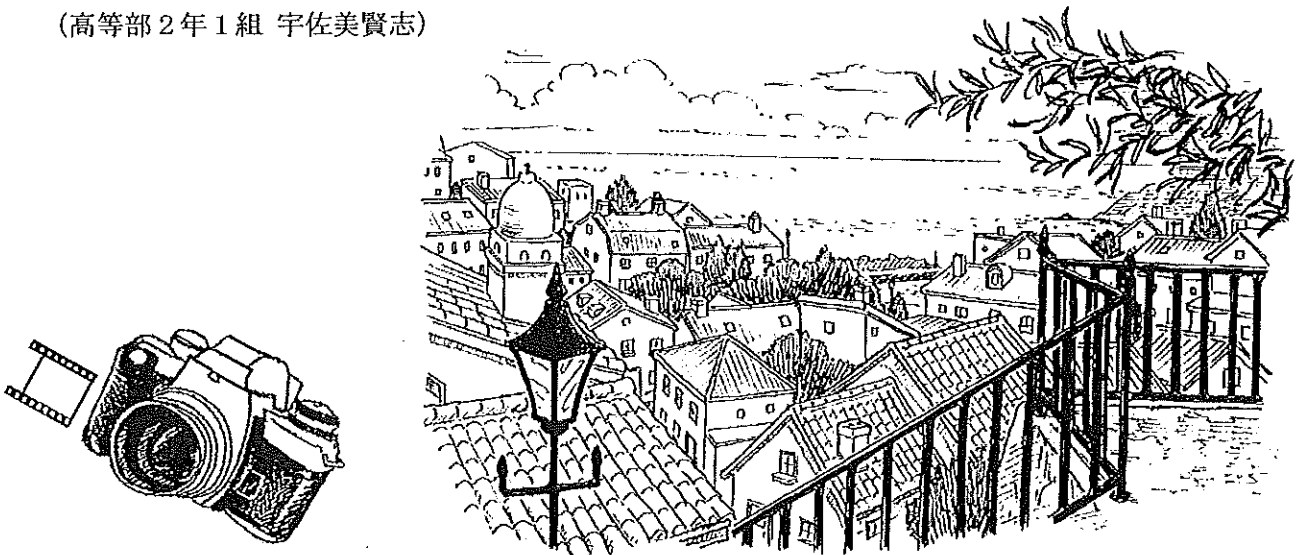
それが寒さのためか、美しさのためかはわからない。けれども、僕はまた一つ、この町の姿を見つけられた。

そのことが嬉しくて、ご飯も食わずにひたすらシャッターを切り続けていた。

メモリー残量がゼロになった時、やっと、ハッと我に返った。

時計の針は12時半を指していた。

(高等部2年1組 宇佐美賢志)



なんだか、教科書の裏にある、見開き2ページの随筆のようですね。自己の心情を中心に描き出される町並みを一緒に体感できるような作文でした。渡辺

素敵な文章ですね。読むばかり目の前に風景が広がっていくような気がします。なぜ、いつもの町が、その時の宇佐美くんにとって魅力的だったのでしょう。高野雪のせいでしょうか。何気なく見ている風景も、少しのきっかけで気になることってありますよね。そういった心情が美しい景色とともに伝わる文章です。私本写真を撮ろうとする、いつもは何となく見ている風景の細部や、空気をリアルに感じることができ、新たな発見があるので、私もとても好きです。宇佐美の撮ったその一枚の写真は、誰かもわからない人との出会いも含めて、記憶に残り、いつか思い出させてくれるはず。もっとたくさん撮りましょう！ 市川

宇佐美くんの撮った写真が見ていいです。寒い時間はあと言う間ですね。時間を忘れるほど、きれいな景色だったのでしょう。斎藤亜、写真を通じて新たな景色や人と出会えるなんてすごいですね。とてもいい文章です。松本

町の風景や写真を撮っている宇佐美くんの様子、おじいさんと、読むのが楽しい中に映像が広がっていた、映画の一場面のように、とても素敵な文章です。⑧

物語感が出ていいですね。美しい風景を写真に写し、そこに自分の感情が込められている。一言して一人称の視点ですが、それゆえに強い主観の体験があざやかに文章に綴られています。景色についての形容が具体的に盛り込まれると、もっと効果的になりそうですね。mm





「合唱コンクール」

学年最後の行事、合唱コンクールが行われた。皆は略して「合唱コン（たまに合コン）」と呼ぶ。日本の大体の学校にある行事だが、この学校の記念すべき第1回は2年前の3学期だった。今年3回目の僕からしたら、ああまたかと思ひ、嫌だなあと正直思っていた。「合唱コンなくなれ」という声が聞こえてくる。その度に僕はそうだな、昨年などと変わらない行事なのだろう、と思う。

クラスの曲は『栄光の架け橋』に決まった。決めた理由も、誰が出した案かも誰も覚えていなかった。ただ一つ覚えているのは、曲決めの話し合いは皆真剣だったことだ。

冬休みを経て、3学期になる。3学期が始まって3日程して練習が始まる。毎年のことだ。3学期は何も大きな行事がないから作られた行事だと言うが、なんだかんだと忙しいのにといい、面倒だと思う。毎年のことだ。——この繰り返しに、「ああしている心情」がよく出ていって思ひます。お本

練習が始まる。最初はまだ時間があると思ひ、適当にやる、僕らの俗に言う鉄板である。そう思っていた矢先、いざ練習が始まってみると、3日後、いや、明日が本番であるかのような練習だった。皆が真剣に音と楽譜に向き合っていた。皆の心の中に優勝という文字があるのがひと目でわかった。嬉しかったというよりは、皆について行けるかという焦りの方が僕には大きかった。僕は歌は好きだが、自信はない。だからこそ、僕は僕なりに不安を解消できるよう練習をした。こんな不安は僕にとって初めてだった。

練習を重ね、本番前最後の週末が来る。その時にはもう僕の不安は無かった、と思う。初めて別々のパートで練習していた僕たちが一緒になって歌えるときが来たのだ。感想はまだ一週間前なのに良くできていると思っていた。僕と同じ考えの人は多かったはずだ。でも、やはり不満はいっぱいあるようだった。その日から皆の色々な意見が出て、アレンジするようになった。僕はというと少し、いやかなり余裕が出てしまった。練習時間にも、だらだらと歌っているだけだった。最悪だ。

本番の日を迎える。リハーサルには僕のやる気スイッチは入っていた。そのせいか、リハーサルで歌う度に完成度は上がっていった。夜を迎える。この時のために皆は3学期の初めから頑張ってきたのだ。精一杯のことをしてきた、と言えば嘘になると僕は思う。けれども、頑張ってきたのは事実だ。『栄光の架け橋』にある「いくつもの日々を越えてたどり着いた今がある」という所は僕にぴったりだ、というのを誰かと話したことをステージ下で思い出した。足が震えるくらい緊張していた。だが、不思議と歌っている最中は冷静だった。表情だってきちんと作れた。いや、作れたというより、自然にできていた顔だった。それくらい僕はこの歌に心を込めていた。

ラストのパート、クライマックスへ移る。今までにない最高の声量だった。驚いた。団結していた。嬉しかった。

その後のブレイクで2組ほぼ全員が集まった。最高だったと皆が口々に言っていた。そこから歌ったり、騒いだりしたが、とても楽しかった。2組皆が団結していて、誰もが満足している顔が見られて、本当に良かった。今まで何度も2組で良かったと思う瞬間はあったが、これほどまでに思ったことはなかった。最高の思い出だった。

僕は思う。果たして結果はどうなのだろう。いや、どうでも良いのだ。優勝なんて高2にあげてやる。僕らにはそんなものよりも、いくつもの日々を越えてたどり着いた今があるではないか。

(高等部1年2組 柏樹健生)



最後の文は、長かった練習の日々と、そこにあった仲間たちとの
連帯感、達成感、充実感。色々なものが凝縮された言葉
で胸に響きました。私も良い思い出になりました。ありがとうございます。渡辺

短い文がきれがあっていいですね。そして最後に歌詞からの引用の長めの文。
心に響く文章です。梅津

最後の文に、柏樹さんの想いの全てがこめられていますね。合唱コンクールの日、

「いっしょに歌え〜」の部分、聴いていて本当に感動しました。

その歌詞にこめられた皆さんの想いは、歌にのってちゃんと冬席に届いていましたよ。(10)

感謝しました。精一杯のことまでやってきていえば 嘘になる。

と素直に言えるのは、柏樹さんやそばで、もと頑張るクラス
メートを見ていたからかもしれないね。結果や賞ではなく、

バに残る思い出が何よりも宝物ですね。カキ

君たちがこがえた合唱で、とても感動しました。真面目にやる、というのは
意外と難しいことだけれど、皆よく努力しましたね。今日の経験を大切にして下エ(11) 市川

短かい歯叩きのいい文章がとってもリスパルでいいなあ。語りの調も素直で、

その子感動が伝わっているいい文章です。小川

最初の「乗り気でない」ところから、皆の様子を見て「不安」を感じるところ、そして中
だるめ、ラストパートへの気分の盛り上がり。その時々の気持ちが素直に書か
れていて、飾らない言葉に共感できました。杉本

いい作文だなあ。嫌々だったところから、実に深いものと
手にした感じが伝わって、読む方にも感慨を呼び起し

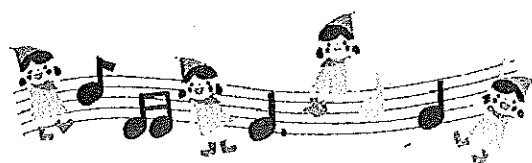
ます。物事は、気が進まなくても一生懸命やってみると、

意外にハッとするモノを手に入れます。イモノ手に

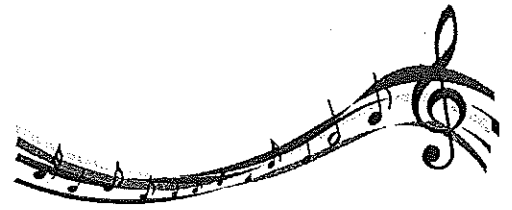
レバ... 何にも格え難、金だね。

合唱コンクールで、真剣だった柏樹の顔、よく覚えてます。

mon



「燃えて花咲く」



長かったようで短かった合唱コンクールは、幕を閉じた。今年は、昨年以上にクラス全員が団結して時間が許す限り、一人一人が全力を尽くした。この合唱コンクールで私たちができるイベントは最後だと思うと、少し切ない。

クラスで揉めることもなく、合唱コンクール当日までの練習期間中、日数が経つごとに、クラスの誰かが私たちの合唱曲「青いベンチ」を休憩時間に口遊むと、その歌声にみんなが乗っかり、だんだんボリュームを上げ、教室にたくさんの音符が舞った。練習の初日は、あまり元気のない音符が飛び交っていたが、4、5日目からは、大きくて太い、他の誰も持っていない、自分だけの音がみんな出ていて、楽しんで歌った。

私たちの良いところは、練習中、全員が指揮者のようであった所だと、私は思う。音がずれていたり、テンポが違ったりすると一旦止めて指摘したり、不満があるとちゃんと言ったり、全員が主役だった。声出しのために外で歌うと、全然声が響かなくて、お腹から思いっきり音を出して練習した。毎日、試行錯誤しながら楽しく歌い、培った私たちの歌声は、本番、一人一人の力強い思いと、やわらかで強弱がはっきりしている繊細な声がホールで一つとなり、素晴らしいハーモニーを響かせた。賞をとることよりもみんなで楽しく良い歌声を見せることが大切ということがみんなの雰囲気であったから、「総合優勝」という良い結果が形として出来た。

この合唱コンクールで、さらにクラスの仲が深まり、来年、高3として歩む道の一本のレールが見えた気がした。

クラスのみんなに感謝の気持ちを伝えたい。「本当にこのクラスの一員で良かった。ありがとう。」と。

(高等部2年2組 三輪紅巴)

歌声を「たくさんの音符が舞った」という比喻を使用して詩的でいいですね。全体的に文章が「言国バ」のようで、合唱の雰囲気がよくできている、素敵な文章だと思ひます。優勝するための素晴らしい努力と団結力ですね。高3になると皆だんてんて道路が分かれていきますが、その気持ちは大切に持ち続けて下さい。市川

「全員が指揮者のようであつた」って、マジでいい雰囲気だったことはいくらもありました。素敵な時間だったよ。市川

「本当にこのクラス一員で良かった。」という思い、歌声に力、各席までちゃんと届いてました。素敵な時間とありがとうございました！ (市川)

「燃えて花咲く」という題名で、「お、何だろう?」と思わされました。クラス全体の合唱コンクールへの息込みが伝わってきました。お疲れ様でした。杉本
皆が積極的に参加した様子が良い文章で見事に表現されています。市川

